

Member's Forum

会員投稿の頁



U-35委員会企画 talk baton 13 活動報告

talk baton とは…

若手プラットフォームづくりの活動の一環として、建築を取り巻く他分野のゲストがトークのバトンを繋げていくコミュニケーショントークイベントです。

建築をフィールドとする私たちと毎回のゲストとの対話を通じて、建築が本来持っている多様性やバイタリティを見つめ直し、これからの建築に求められる領域を探っていきます。

U-35委員会ホームページ

HPを開設しました。

新着情報や過去の活動報告もご覧になれますので、ぜひ一度お立ち寄りください。

<http://www.aaj.or.jp/u35>

U-35委員会Facebookページ

活動内容やメンバーの雑感などぎっくばらんに情報をアップしています。ぜひ一度お立ち寄りください。

<https://www.facebook.com/U35.aaj>



川田氏によるレクチャーの様子



今回のゲストは壁画制作を主力に作家活動する川田氏。建築と壁画は空間を扱い共有するという意味では共通する要素があります。公共的な施設で作品を制作する川田氏と対話を重ね、新たな視点や発想を探りました。会場は、六甲ミーツ・アート芸術散歩2017での展示会場である六甲山ホテルです。前年度の六甲ミーツ・アートでは自然景観に呼応し樹木にフレスコ画を重ねた作品で公募大賞グランプリを受賞し、今回は招待アーティストとして参加されました。フレスコ画は漆喰が乾かないうちに顔料で描く絵画の古典技法の一種です。展示作品「The soft culture」の解説と、自身の壁画制作へのスタンスやこれからの抱負について語って頂きました。初めに、六甲ミーツ・アート芸術散歩 総合ディレクター/キュレーターの高見澤清隆氏から展覧会全体について語って頂き、今回のtalkbatonをスタートしました。

■六甲ミーツ・アート芸術散歩について

高見澤 六甲ミーツ・アート芸術散歩は六甲山を舞台に展示される数々のアート作品を、ピクニック気分で周遊しながら楽しめる現代アートの展覧会です。2010年から毎年開催し、今年で8回目となります。阪神電気鉄道株式会社と子会社が運営していて、公的資金の投入はなく、民間企業による営利活動としてのアートイベントであることが大きな特徴



「木立」の展示

です。毎年、「赤字だったら打ち切り。」というプレッシャーを背負いながら実施しており、入場者数よりも収支が取れているかが重要とされ、経営的な視点が求められます。このため、展示作品に関しては、事業の原資として見る側面が主催者側にあることをアーティストの方々にも伝え、了承いただいています。今回は総勢39組のアーティストが参加しており、私を中心に数名のスタッフ、インターン、アルバイトで運営しています。

■作品「The soft culture」

川田 今回、六甲山ホテルの屋外にある敷地を展示会場として作品を制作しました。この敷地を選定した理由は、六甲ミーツ・アートの会場となっている六甲山上の様々な要素（自然、水、くつろげる場所、屋内空間など）が全てコンパクトに納まっており、一つの壁画を様々な手法で見せることが出来ると思ったからです。この敷地を「木立」「広場」「温室」の3つに区分して作品を制作しました。複数の木立に寄り添うように壁画を描き、その幾つかを解体・移動させて別の場所に展示するという新しい壁画制作を試みました。作品のプロセスを辿りながら、解説します。

①「木立」の展示

昨年の六甲ミーツ・アート作品の延長線上にある展示です。今回は、この場所を制作スペースとして、全てのフレスコ画を制作しました。樹木を囲むように壁画を制作し、その幾つかを取り外し、別の場所に移動させるという行為を繰り返しました。

②「広場」の展示

「木立」（＝アトリエ）で制作した壁画を「温室」（＝展示会場）に移す過程をチャプタ画像のように切り取って展示しているのがこの「広場」です。「木立」から「温室」への移動には、2種類の方法をとりました。一つ目は担いで移動させ、二つ目は池の上にかだを浮かべて移動させました。移動の痕跡として



「広場」の展示

いかだも作品の一部として展示しています。
 これまで、私は公共の場所で様々な手段で壁画を制作・発表してきました。但し、展覧会という一定期間にのみ「壁画」として存在することを前提とした制作であり、会期が終わると「壁画」ではなく空間の中にある「飾り(装飾)」に変換されることに気づき、最近では「壁画」として残す方法に強い関心があります。今回は、壁画と相いれない素材として、移動という手段を作品の一部に挿入しました。

③「温室」の展示

制作スペース、移動手段の過程を経て、「温室」は本来的な展示会場にあたります。最後にここで作品に対して空間という素材が加わりました。壁画と空間を独立させた状態から合流させることは初めての経験で、空間に対して壁画をどのように配置するのか試行錯誤しました。「木立」で制作した壁画と別の用途のために存在した空間との関係性や人の動線を加味して、展示会場を構成しました。今回の作品を一言で表現すると、「実践的な実験」です。壁画が空間に対して、独立した環境におかれた場合、作品として自立できるのか、さらに社会に及ぼす影響の検証と考察を試みました。

■新しい壁画表現を試みて

質問 「壁画」を移動するという試みを経て、率直な感想を教えてください。

川田 表現としてのある一定の到達点に達したと思いますが、相対的に良いものかどうかの判断はまだこれからだと考えています。

質問 温室内に壁画を表現する展示方法については最初からイメージがあったのでしょうか。室内に垂直な壁画が配置されることによって、外部の林を反転して室内に再構築されたように感じました。

川田 当初より配置のイメージはありましたが会場に合わせてより自然な形で構築してきました。感じて頂いたことはまさに表現と

して考えていたことです。

質問 壁画の色や柄についてのイメージを教えてください。「温室」の展示は茶系の色で統一されていますが、「広場」や「木立」での展示は黄色や他の色を使用するなど、表現に差異がありますがこういった意図が教えてください。

川田 柄は今年のモチーフである六甲山の植物を踏襲し、作品の連続性を意識しました。色についてはフレスコ画の技法から下絵で最も標準的な茶系の色を使用しています。

表現の差異については、温室の展示は移動した終点にある、ということが大事なのですが、意図的に温室内の壁画はそのままにして、「木立」や「広場」の壁画には加筆をして表現に重ね付けをすることで視覚的な反転、つまり「温室」で制作して外に展示しているという逆の状況も想起させることを狙っています。どこで制作したかが重要でなく、結果的に誕生した空間が大事だと考えているからです。

■壁画への想い

質問 私たち建築設計者はある案をブラッシュアップさせる時に様々な人の意見を聞いたりプレストしたりするのですが、川田さんはどのようにアイデアを膨らませていくのでしょうか。

川田 私はできる限りの資料・情報を集めたうえで確信を持って進めていくことが多いです。人に相談することはほとんどありません。自分のアイデアに自分で責任を持って進めて行きたいからです。

質問 本来空間に固定される「壁画」に移設というテーマを盛り込むなど、表現の幅を広げていると思いますが、「壁画」としてこれは譲れない、守りたいポリシーというものを教えてください。

川田 この場所に、空間に、美術が必要かどうかです。公共的な考え方からは離反しているかもしれませんが、私自身ここに絵が

あっても意味がないと思う空間もあります。

■壁画と建築の関わり合い

質問 「壁画」は壁や柱といった建築の構成要素を利用するものと考えていましたが、「木立」を柱に見立て、それを移動することで「温室」という本来「壁画」が存在し得ない何もないワンルームの空間に「壁画」自体が柱の様に建築の構成要素に変遷しているという反転が建築的に面白く感じました。

川田 作業療法的な観点からすると「壁画」は人々が建物の中で過ごす日常のルーティンの中に一つ何かを差し込むことで、些細なことですが何かが変わるという働きかけかなとも考えています。

質問 それは「壁画」がその空間からなくなっても作品として成立するかということから、「壁画」によってその空間に何をもたすことができるかというテーマへ移行しつつあるということでしょうか。

川田 考え方としては逆だと思っています。結果的に私の「壁画」は写真や断片でしか存在を継続させることができないものがほとんどです。身体的な情報は消え視覚的な情報しか残らないという中で、空間に対して日常の変化をもたらすということは常々考えてきました。その上で美術というフィールドで「新しい壁画」を追求することによって、その表現はより進化してきました。仮設的である「壁画」そのものが残るということ、あるいは「壁画」という存在自体への問いかけに変わってきたと思っています。

talk baton 13 を終えて

高見澤氏と川田氏の間には、理解と強い信頼関係があった。アーティストとディレクターは、育て・育てられる関係が理想で、連綿と受け継がれてきた文化なのだろう。設計者と施主の関係にも似ていると感じる。そうなるための信頼を、今年の展示作品で勝ち得た川田氏の真摯な姿勢にも学ぶべき点が多かった。今回の企画に協力いただいた高見澤氏、川田氏とアートコートギャラリーにお礼を申し上げたい。

対 談 日：2017.11.03
 場 所：六甲ミーツ・アート芸術散歩
 2017 六甲山ホテル展示会場
 モデレーター：吉田 悠佑（大林組）



「温室」の展示



打ち上げ会での集合写真